

2026 年 7 月 17 日

インド・6月インフレは+4.38%と17ヵ月ぶりに中銀目標超え(Asia Weekly)

～シンガポール 4-6 月 GDP は AI・半導体関連投資の旺盛さが下支え役に～

経済調査部 主席エコノミスト 西濱 徹

(TEL : 050-5474-7495)

(経済指標の振り返り)

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
7/13(月)	(インド)6月消費者物価(前年比)	+4.38%	+4.30%	+3.94%
7/14(火)	(シンガポール)4-6月実質 GDP(前年比・速報値)	+5.7%	+5.5%	+6.3%
	(中国)6月輸出(前年比)	+27.0%	+18.2%	+19.4%
	6月輸入(前年比)	+36.0%	+24.0%	+27.4%
7/15(水)	(韓国)6月失業率(季調済)	2.7%	--	2.8%
	(中国)4-6月実質 GDP(前年比)	+4.3%	+4.5%	+5.0%
	6月小売売上高(前年比)	+1.0%	▲0.1%	▲0.6%
	6月鉱工業生産(前年比)	+5.3%	+4.7%	+4.5%
	6月固定資産投資(年初来前年比)	▲5.7%	▲4.9%	▲4.1%
	(フィリピン)5月海外送金(前年比)	+2.0%	--	+2.0%
7/16(木)	(韓国)金融政策委員会(政策金利)	2.75%	2.75%	2.50%
7/17(金)	(シンガポール)6月非石油輸出(前年比)	+20.7%	+30.0%	+38.4%
	(マレーシア)4-6月実質 GDP(前年比・速報値)	+5.8%	--	+5.4%
	6月消費者物価(前年比)	+1.9%	+2.1%	+2.0%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[インド]～生活必需品の物価上昇を受けて、6月のインフレ率は+4.38%と中銀目標(中央値)を上回る～

13日に発表された6月の消費者物価は前年同月比+4.38%となり、前月(同+3.94%)から加速した。RBI(インド準備銀行)が定めるインフレ目標レンジ(4±2%)の中央値である4%を17ヵ月ぶりに上回った。前月比も+1.03%と、前月(同+0.75%)から上昇ペースが加速している。イラン情勢の悪化に伴う原油価格の上昇を受けて、ガソリン価格が段階的に引き上げられるなどエネルギー価格が上昇したほか、生鮮品をはじめとする食料品価格も値上がりしており、生活必需品を中心に物価上昇圧力が強まったことが影響している。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+3.89%となり、前月(同+3.90%)から伸びがわずかに鈍化した。引き続き、RBIのインフレ目標レンジの中央値を下回って推移している。前月比も+0.33%と、前月(同+0.50%)から上昇ペースが鈍化した。エネルギー高に伴う輸送コストの上昇に加え、金融市場に

おけるルピー安を背景とする輸入物価の押し上げを受けて、幅広い財で価格上昇の動きがみられる。一方、教育関連など一部の分野を除いてサービス価格の上昇ペースは鈍化しており、物価動向は財とサービスでまちまちの様相を呈している。

図 1 IN インフレ率の推移

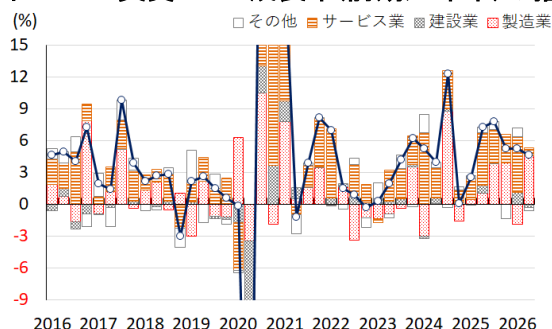


[シンガポール]～4-6月 GDP はイラン情勢による混乱の悪影響を AI 関連需要の旺盛さが相殺～

14日に発表された4-6月の実質GDP成長率（速報値）は前年同期比+5.7%となり、前期（同+6.3%）から伸びが鈍化した。前期比年率ベースの成長率も+4.61%とプラス成長を維持したものの、前期（同+5.25%）から伸びは鈍化している。イラン情勢の悪化を受けた原油高がインフレを招いているほか、供給懸念の高まりを背景にサービス業や建設業の生産が下振れした。一方で、製造業の生産活動が活発化したことが景気全体を下支えした。なお、製造業では、供給網の混乱を背景に化学関連やバイオ医薬品関連の生産が下振れしている。一方で、世界的なAI（人工知能）関連投資の旺盛さを追い風に、電子機器や精密機械関連の生産が大幅に押し上げられており、業種間のばらつきはこれまで以上に鮮明になっている。

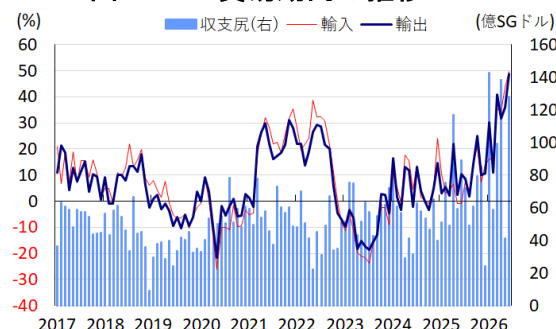
17日に発表された6月の非石油輸出額は前年同月比+20.7%となり、前月（同+38.4%）から伸びが鈍化した。前月比も▲8.86%と、前月（同+7.69%）から6ヵ月ぶりの減少に転じており、持ち直しの動きに一服感が出ている。財別では、主力の輸出財である半導体など電子部品関連や、電気バルブなど電気機械関連で堅調な動きがみられた。一方、化学製品関連や金属関連で大幅な下押し圧力がかかったことが、輸出全体の重しとなった。原油関連を含む総輸出額は前年同月比+48.9%となり、前月（同+36.0%）から伸びが加速した。前月比も+3.4%と、前月（同▲4.1%）から2ヵ月ぶりの増加に転じており、石油製品関連の底堅い動きが全体を下支えしている。一方、輸入額は前年同月比+49.8%となり、前月（同+43.5%）から伸びが加速した。ただし、前月比は▲7.0%と、前月（同+5.5%）から7ヵ月ぶりの減少に転じており、持ち直しの動きに一服感が出ている。財別では、輸出の堅調さを反映して機械関連の輸入は底堅い動きをみせたものの、金属関連や鉱物資源関連など幅広い分野で下押し圧力がかかった。その結果、貿易収支は+128.33億SGドルとなり、前月（+41.50億SGドル）から黒字幅が拡大した。

図2 SG 実質 GDP 成長率(前期比年率)の推移



(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

図3 SG 貿易動向の推移

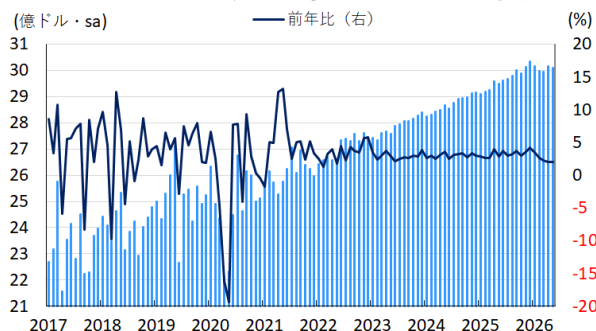


(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

[フィリピン]～イラン情勢による移民労働者を巡る環境悪化が送金の重しに、一方でペソ安の恩恵も～

15日に発表された5月の海外移民労働者による送金流入額は前年同月比+2.0%となり、前月(同+2.0%)から2ヵ月連続で横ばいとなった。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は2ヵ月ぶりの減少に転じるなど、一進一退の推移となっている。一方、金融市場でのペソ安の進展を受けて、ペソ建て換算額は押し上げられており、個人消費をはじめとする内需を下支えすることが期待される。国・地域別では、全体の4割を占める米国からの流入に加え、1割を占める欧州からの流入も底堅く推移している。一方、イラン情勢の悪化を受けて、全体の2割を占める中東からの流入が下振れしているほか、その影響が波及する形でアジアやアフリカからの流入にも下押し圧力がかかっており、移民労働者を取り巻く環境の悪化が足かせとなっている。

図4 PH 移民送金(季節調整値)の推移



(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成、季調値は当社試算

以上